

敦煌学を写し出す高精度広角レンズ

——『敦煌文書の世界』を読んで

柴 剣虹

五年前、日本の名著刊行会・菊池克美氏の計画により、『敦煌文書の世界』が刊行された。これは、池田温氏の論文数編が選出され、序編、本編、付編の三編からなる一冊に集められたものである。

氏は、たとえるならば学者の風格を持つ武将であり、みなを先導する存在である。中国の敦煌学界とも緊密な関係を維持されており、その論著は国際的にも敦煌学の発展に大きく寄与している。四年前、『大家小書（大家の書いた小冊子）』という構想のもとに、『日本中国学文粹』叢書の編輯に着手した王暁平教授から、『敦煌文書の世界』をこの叢書の第一弾に収めることについて相談を受けたとき、私が直ぐさま諸手を挙げて賛成したのはこのような理由からである。そして今ここに、

張銘心、郝軼君、両訳者の苦勞の賜物である中国語訳本『敦煌文書の世界』が出版されたのである。私は中華書局の編集審査員として一足先に拝読の機会を得たので、いささか感想を述べさせていたいただきたいと思う。

池田温教授は敦煌經濟文書を専門に研究されており、当初私はこの著書では文書の内容紹介を通じて敦煌の社会經濟活動が具現化されるものとはばかり考えていた。しかしながらページをめくるにつれ、自身の予想が全面的でなかったことに気が付かされたのである。まず「序編」では、敦煌という土地あるいは莫高窟について、また藏経洞から発見された古文書についての概説とともに、敦煌学、とりわけ日本の敦煌学を紹介する。続く「本

池田温著／張銘心・郝軼君訳
敦煌文書の世界



2007年
中華書局 [1911円]

編」においては、敦煌の歴史的背景を説明した上で、文書資料を中心に敦煌の流通經濟を解説するにとどまらず、敦煌写本の物質的な形態と真偽鑑別の方法にまで言及する。最後に「付編」では一九八〇年代以降の敦煌吐魯番学の發展をめぐって、敦煌学と日本文学の關係を探究している。総じて、本書の扱う内容は、文書そのものを遥かに超えているのである。飾り気のない簡潔な文章で核心を突いており、敦煌史、敦煌学、敦煌文書の入門書として非常に読みやすい。また同時に著者の研究成果が凝縮された学術的名著でもあり、随処に研究の精髓を垣間見ることが出来る。まさに敦煌学をクリアに写し出すことのできる高精度広角レ

中国年鑑 2008

◎好評発売中◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955年創刊。現代中国に関するあらゆる分野の最新情報、基本情報を提供。

B5判 約500頁

価格：18,900円(税込)

◆特集

試練にさらされる胡錦濤政権

1. 「「和諧社会」建設へ向かう胡錦濤指導部」 金子 秀敏
2. 「市場手段と行政関与の間で—新陣容による経済政策」

浜 勝彦

3. 「「和諧世界」掲げ大国外交を推進」 塚越 敏彦

4. 「安心と信頼の回復を目指す食品安全政策」 森 路未央

◆動向

政治、外交、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、香港、マカオ、台湾、国民経済、財政、金融、証券、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、IT産業、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、医療・医学、環境問題、教育、文化、宗教

◆資料

統計公報、主要文献・人事、中国現代史年表ほか

※お問い合わせは中国研究所事務局まで。

(社)中国研究所

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: cnenkan@tcn-catv.ne.jp

URL: http://www.soc.nii.ac.jp/cifa/

ンズであるといえよう。
本書は読者の視野を文書から敦煌という地域、また敦煌周辺の広範囲にわたる複雑な社会活動の場へと拡大し、さらには遠く東の島国、日本特有の文化背景にも焦点を当てる。加えて、それらを古く長い歴史的、文化的背景の中で解釈を試みている。私が「広角レンズ」と表現したゆえんはここにあるのである。以下、私自身が近年関心を寄せている敦煌文化史と敦煌学史にかかわる論述を中心に本書の内容をご紹介します。

著者は「序編」の第一章「敦煌」に「名族社会」という一節を設けている。ここに割かれる紙幅はわずか二千字にも満たないが、漢晋代以降、敦煌社会を実質的

に支配していた張氏、索氏、令狐氏、氐氏、宋氏などの名族に対して詳細かつ適切な分析を加えている。敦煌は、元来水にも草にも恵まれた場所、土地が広く人口密度は稀薄であった。漢の武帝期に郡が設置されてより徐々に開発が進められた。豪族の勢力が抑えられ、商人の交易活動が保護された。また一方では灌漑の整備が進められ、深耕が提唱されたことにより農業が発達した。魏の初頭、倉慈、皇甫隆が太守をつとめたころには、仏教が敦煌に伝来し、莫高窟の開鑿が始まっている。中原から河西地方へと多くの人民が移住したのは東晋、西晋のことである。著者はこの歴史の局面に重点を置きつつ論を進め、「豪族は土地兼

并とともに、往来する西域の胡商をつかまえて通商の利益を壟断しようとした。著名な文化人や言行逸話に富む高士を輩出した諸名族は、みなかかる基礎のうえにその教養を蓄積しえたのである」「漢晋の文化をこの辺地が保持し、次代の新文明形成に重要な一ソースたらしめたことは、敦煌名族の果たした歴史的役割であったといえよう」と論を結んでいる。以上の二点は、敦煌文化の基盤あるいはみなもとに関わっており、重要な役割を果たしていた上述の五姓の名族を考慮すれば、十分な検討を要する問題であるといえよう。中国封建社会の長い歴史において、権力の踏襲と文化の伝承には独自の法則があり、極めて特徴的である。中

中央集権制では皇権をもって権力の象徴とされ、往々にして文化の精髓が宮廷に結集することとなった。一方、地方では赫突たる豪族たちが権力を踏襲し、教養を重んじた名族により文化が継承されたのである。当然のことながら、時には権力と文化、両方を一手に担う者も現れた。

シルクロードの喉元に位置する敦煌も例外ではなく、儒教文化を主流とした中華文明の存続、発展に関して、名族が演じた役割を看過することはできない。また敦煌は「華戎の交わる所（漢人と異民族のあつまる所）」と称される国際文化都市であって、外来文明やさまざまな宗教、文化が多能的に融合し、それが受容されていたということも重要である。この点については、続く一節「社会の変質」および「本編」の第一章第二、三、四節に言及されている。著者は、敦煌の「中国人・中国文化を中核としつつも多様な外族・外来文化を吸収した」ことによる優位性を認めつつ、論点をシルクロードの途絶によるソグド人集落・徙化郷の衰退、東西交易の衰退、文化交流の遮断に

移し、八世紀中葉以降、敦煌にとって「榮養源の涸渇はまぬかれえ」ず、積極的役割を次第に失い、かつての盛況を再び呈することはなかったことを示している。ここから我々は、敦煌の文化や芸術の榮と衰退の原因、あるいは藏経洞の封鎖時期と原因やそこに残された多種多様な古写本の歴史的背景をいくらか理解することができるのである。一方で、吐蕃の統治期や西夏の占領期における消極的役割については深くとらえずに感否めず、今後の議論を期待したい。

敦煌学史についていえば、「序編」の中に「敦煌学と日本人」という一章が著わされており、我々の関心を引く部分である。この章は全四節から構成される。

第一節では狭義、あるいは広義の「敦煌学」の研究対象について解説される。一九八三年の敦煌吐魯番学会成立以降、学界が広義の「敦煌学」に対して「敦煌吐魯番学」の呼称を意識的に用いるようになったのは吐魯番文書の重要性を認識したことに起因する、との指摘は的を射たものである。つけ加えるならば、この学会が

成立したのは唐長孺教授をはじめとする学者らが吐魯番文書の整理と研究に邁進し、卓出した成果を挙げたからこそである。次に「敦煌学」の語が何時誰によって初めて用いられたかという問題については、「石浜純太郎（二八八八—一九六八）が大坂懷徳堂夏期講演（一九二五年八月）ですでに敦煌学の語を何回か使用しており、二〇年代には一部で使われていたと認められる」としつつも、石浜純太郎の文章が正式に発表されたのは一九四三年であることから、一九三〇年三月に陳垣が執筆した『敦煌劫余録』序に触れて、

「陳寅恪（一八九〇—一九六九）の自覚的使用により、この語が学界に定着したと解して差支えなからう」との見方を示しているが、これも客観的事実として適当であろう。さらに著者は敦煌学の成立と発展の歴史を、草創期（二十世紀初〜一九一〇年代）、生長期（一九二〇年代〜四〇年代初）、確立期（一九四〇年代中期〜七〇年代）、発展期（一九八〇年代、中国敦煌吐魯番学会の成立）の四期に区分する。この区分は中国、日本、そして欧洲の研究

状況全体が考慮されており、我々がかつて一九四九年を区切りとして二分したのに比べ、科学的でこの新興の国際的学問分野の形成と発展により即しているといえよう。ここに示される確立期と発展期の間には若干の隔たりがあるが、私は以前一九七八〜一九八二年を「過渡期」しただけがあり、これをもってこの空白を埋めることができるかもしれない。

第二節では、敦煌学に対する日本人の貢献を叙述している。簡潔なことばで意図が尽くされ、客観的で公正であり溢美溢悪の言もないので、ここには私の贅言を要しないであろう。著述の中で私が特に興味を持ったのは第三節「日本の敦煌学の特性」における分析である。敦煌、吐魯番は世界の四大文明（中国、インド、欧洲、イスラム）が出会い交流する地域であり、そこから発見された文献や文物は中国、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、日本など世界各地に分散所蔵されており、敦煌吐魯番学が国際性豊かな総合的学問分野を形成するのは当然のことである。著者は「敦煌や吐魯番の住民

の多様性に応じ、当然そこで産出された文化遺産も多様であり、しかもバラバラな多源要素のままではなく、相互交流、浸透、同化の複雑な様相を呈するのである。かように見てくると、島国で比較的単純な住民構成をもつ日本の社会とは、およそ対蹠的世界であることが容易に理解されよう」従がって日本人の敦煌・吐魯番に対して抱く所の、異質な世界に対する強いあこがれが、シルクロードブームの背景でもある」と述べ、これは日本人の敦煌吐魯番学に関心を示す重要な要因のひとつではあるが、これが唯一無二の根本的な原因ではないと指摘する。そして「仏教東伝の道に対する情熱が、西域への学問的探究に日本人を駆立ててきた」のであって、「仏教こそはわが国（日本・訳者注）にギリシア起源の西方的文化要素をもたらした媒体で、その伝来をたどる努力は日本文化のルーツを探る志向と無縁でない」と続けている。私は、これをこころの中で駆り立てられる人間の主観的要素、仏法にいうところの因（In）である、と考える。また同時に、

の多様性に応じ、当然そこで産出された文化遺産も多様であり、しかもバラバラな多源要素のままではなく、相互交流、浸透、同化の複雑な様相を呈するのである。かように見てくると、島国で比較的単純な住民構成をもつ日本の社会とは、およそ対蹠的世界であることが容易に理解されよう」従がって日本人の敦煌・吐魯番に対して抱く所の、異質な世界に対する強いあこがれが、シルクロードブームの背景でもある」と述べ、これは日本人の敦煌吐魯番学に関心を示す重要な要因のひとつではあるが、これが唯一無二の根本的な原因ではないと指摘する。そして「仏教東伝の道に対する情熱が、西域への学問的探究に日本人を駆立ててきた」のであって、「仏教こそはわが国（日本・訳者注）にギリシア起源の西方的文化要素をもたらした媒体で、その伝来をたどる努力は日本文化のルーツを探る志向と無縁でない」と続けている。私は、これをこころの中で駆り立てられる人間の主観的要素、仏法にいうところの因（In）である、と考える。また同時に、

<p>中国関係専門店 東方書店〔店舗のご案内〕</p>		<p>ご来店をお待ちしております</p>
		
<p>地下鉄神保町駅●半蔵門線・都営三田線、新宿線A7出口より徒歩1分 / JR 御茶ノ水駅●御茶の水橋口より徒歩10分</p>		<p>地下鉄江坂駅●5号出口より徒歩5分（JR 新大阪駅より地下鉄御堂筋線で2駅目）</p>
<p>〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3 TEL:03-3294-1001 / FAX:03-3294-1003 営業時間：10時～19時（月～土）/12時～18時（日祭）</p>		<p>〒564-0063 大阪府吹田市江坂町2-6-1 TEL:06-6337-4760 / FAX:06-6337-4762 営業時間：10時～18時/土日祭休</p>

「日本に古代文化遺産が比較的豊富に伝存している事情が、斯学の発展の一層直接的前提をなしていることを念頭におくべきである」との見解が示されるが、これは外部に存在する客観的条件であり、縁 (yarn) に相当するのではなからうか。因や縁が存在すれば、必ず果報 (fruit) が生じるのである。つまり、日本人は全体として文化的ルーツを探り新しい文化を創り出そうとする強い意識を持つており、そこに豊富な中国の古代文化遺産と色濃い仏教文化の気風があいまって、日本の敦煌吐魯番学の発展が促進されたのである。ここでは、日本人のシルクロードブームや敦煌ブームが尽きることなく続く理由を述べるにとどまらず、日本の敦煌学が文化の源流にある民族的特徴を重視する理由を知る手掛かりをも示してくれているように思う。敦煌学、敦煌文化ひいてはあらゆる伝統文化を広く行き渡らせ、向上させるために、今日我々が取るべき着実な方法を読み取ることができよう。

著者は、「日本における敦煌学の意義」

を述べるにあたり、日本の優位性や顕著な寄与ばかりを説いているのではない。「付編」に設けられた二節では、日中国における研究状況の客観的比較に立脚しつつ、中国の敦煌文学研究が日本の上代文学研究に与えた示唆について述べている。「近年わが国にも和漢比較文学会が生れ（一九八三）、上代文学と漢文学の比較文学的研究も意欲的に推進されている。しかし局外者から眺めると狭義の影響、模倣の追求に偏りトリヴィアリズムに墮しかねない懸念を感じさせる。大陸国と島国、多民族社会と相対的単民族社会、先進文明と後進文明、政治優位の文学伝統と人情中心の文学世界、中・日の相異を挙げ出せばきりがなが、比較文学研究の進展は差違の諸相を一段と明確に浮かび上らせるであろう」との指摘は「敦煌文学」の域を超え、共通点ばかりを比較する文学研究の限界を知らしめている。この意見は、日中両国で新興の学問である比較文学研究に携わる者にとって即効性のある清涼剤となるだけでなく、両国の敦煌文学研究にも拍車をか

けている。成果に対する評価は過賞することも媚びへつらうこともなく、問題点に対する指摘は端的に要点をついているにもかかわらず、優雅で穏やかな態度はまさに学者の風格を持つ武将そのものであり、魅力溢れる部分である。

(チャイ・チエンホン 中華書局編審／訳者・山本孝子 京都大学大学院文学研究科博士課程)

*本稿の原文は、「精緻精彩的敦煌学広角鏡——読《敦煌文書的世界》」として、『文匯讀書週報』（二〇〇八年二月二十九日）に掲載されましたが、紙幅の制限のため、一部省略を余儀なくされました。今回、日本で全文を公表したいという筆者の意向により、翻訳して紹介いたします。（編集部）

*